

も前述のように飛鳥時代におけるよりも大いに進歩しており、従つて唐文化の受容態勢も、或る程度これを批判して受容れ、これにさらに潤色を施して、日本的な文化にし得るような状態にあつたと見てよからうと思つたのであります。それにもかかわらず、當時の彼我の文化の程度は、なおよほど懸け隔つていたから、當然の勢として、まずその模倣追隨が行われたのであります。

今その若干の實例を挙げてみますと、第一に奈良の都の作り方は、唐のそれを模倣したものであることは御承知の通りであります。奈良朝以前では、都の地は定まつておらず、奈良、難波―大阪、大津方面と轉々として移つておりました。それがともかく七代の間、奈良に都を定めることになつたのであります。その奈良の都は、朱雀大路を真中にして、條坊の區劃誠に整然たるものであります。これは全く唐の都長安の形をそのままうつしたものに外ならないのであります。次に教育、學校の制度について見ますと、聖武天皇の時に教育制度が定められ、都に大學を置き諸國に國學を設け、都にいる或る位以上のものの子弟は大學で、地方のものは國學で學び、學科としては、論語、孟子、周易、書經、春秋左傳等が教えられ、孝謙天皇の時には、各家に孝經を一本ずつ備えて精讀するように勧められたような有様であります。また、上述の經書の學問とは別に、支那の文章を作る稽古をするいわゆる文章道がありまして、立派な文章を書く人が輩出しました。有名な粟田馬養、阿倍仲麻呂、吉備眞備、淡海三船などがでて、巧みな漢詩文を作り、その詩文を収録編纂した本までもできております。以上は、唐の學問、教育制度が日本に模倣されて行われた例證であります。これに伴つて印刷術の如きも少々ながら行われることになりました。現在法隆寺には、稱徳天皇の時に供養のために作られた百萬塔―三重の小塔―が残つておりますが、その塔